

## 東京バッハ合唱団「野尻湖 2016 祝祭合唱団」に参加して

— いつも私たちの永遠のいやしを願いながら —

林 貞敬（東京バッハ合唱団団員）

8月4日（第1日）

54年の歴史を持つ東京バッハ合唱団の今回の野尻湖合宿は、例年とは異なり、大村恵美子先生、山本悠尋先生、チェロ演奏者の岡山ひかりさんをはじめ、第1陣の参加団員の到着の直後（14：30）から、練習が始まった。忙しいスケジュールのなか駆けつけて下さった伴奏者・ピアノ演奏者の石川優歌さんは、宿泊する野尻レイクサイドホテルの室内に荷物を置く間もなくピアノの前にすわることとなった。

練習会場の野尻マリンパークは、ホテル敷地に別棟で立つ赤い屋根と黄色い壁が映える可愛い建物で、正面の広い窓からは黒姫山に沈む夕日が美しく映る湖面を一望でき、団員のミニコンサート会場としても毎年使わせて頂いている。湖畔とはいえ西日の当たる外はまだ暑い室内はクーラーが効いているので団員は涼しい。



■野尻湖と黒姫山

8月5日（第2日）

翌日のワークショップ当日は、前日からの熱心な練習で、体調を少し崩される方もおられたが、準備が進むにつれ、皆の温かい励ましと心遣い、お互いの思いやりのなか、2日目か

ら参加したメンバー、直前までに駆け付けた方も加え、ワークショップの始まる時刻（18：30）には、全員が元気に顔を揃えた。

ワークショップとミニコンサートの開催を、信濃毎日新聞で知った方、ポスターを見て来られた方、口コミで知ったという方が次々と、会場である、町の中心地で船着き場の前、野尻ナウマンゾウ博物館近くの、広い駐車場のある信濃町公民館野尻湖支館へ集まって来られた。[この企画を後援してくださった信濃町教育委員会のご配慮で、“信濃町のみなさんとのコラボ”と銘打たれたチラシを、同町小中学校の全生徒 554 名のご家庭にお届けいただいたのはじめ、町立施設の窓口、黒姫駅の観光案内窓口などにも、合計 1000 枚ほどを置いていただいた。]

同町教育委員会のスタッフで、当企画の立ち上げの段階で担当者だった長安さん（現在は小林一茶記念館スタッフに移動）をはじめとする合唱好きの若い女性たち（ソプラノ）、テナーのパートが弱いと聞いたからテナーのパートを歌うという中年の男性、神山教会での東京バッハ合唱団の演奏会には昔から聴きに来ているという方（テナー）、バスを歌うという男性の方たち、私たちはアルトかしらという中年の女性の方たち、そして、開催時刻ぎりぎりには、湯河原に在住で、休暇中は近くの野尻大学村に避暑に来ているという、父子が駆けつけて下さった。元小学校教員だったというお父様の話しでは、身体に不自由のある息子さんが、公民館で東京バッハ合唱団が開くというワークショップに、ぜひ行ってみたいから連れて行ってほしいと言って、お父様と一緒に参加したのだそうだ。もちろん、演奏を聴くためだけに来られた方もいる。

私はテナーを担当しているので、テナーを歌う私の隣に座られた方の思い出を書きたい。先程書いたお父様と身体の不自由な息子さんはテナーであった。お父様が隣であったのでその話によると、息子さんは私（筆者）の娘と同じ年で 30 歳との事である。チラシを見て息子さんが参加したいとの事で、滞在先の大学村から車で会場の公民館へ足を運んだという。

ワークショップ“バッハを日本語で歌ってみよう”は、山本悠尋先生の指導で、コラール《イエス わが喜び》（カンタータ 147 番の第 10 曲、「主よ、ひとの望みの喜びよ」の邦題で有名）のさわりから始まり、発声のための身体のほぐし、体操・発声へと進み、各声部の音取り練習、そして、参加者全員各声部が一緒になってコラールの実際の演奏に入った。この過程を通し、牧野喜（まきの・よしお）さんも、立ち上がって団員（筆者）と手をつなぎ身体を寄せ合って合唱に加わった。ルーテル教会で讃美歌や合唱には慣れているとの事であった。お父様も歌詞をかみしめるように息子さんに寄り添い一緒に歌った。山本先生の何回かの練習で、お父様もあの有名な曲のテナーパートを、団員、参加者、そして他のパートと一緒にアンサンブルが可能となっていた。筆者と手をつないで一緒に静かに身体を揺すって楽しんでおられるように見える喜（よしお）さんをお父様は立ち上がって抱きしめ、背中に手を置き、軽くリズムを取り、もちろん、笑顔でアンサンブルを楽しんでおられた。合唱が始まるころには、喜さんも呼吸が整い、曲と合わせて身体を静かに揺らして、バッハ 147 番のコラールを楽しんで居られるようであった。私も目を合わせて歌った。喜さんもこちらを

見ていた。

ここで突然だが、上に記した喜（よしお）さんと同じ年の私の娘には長男（1歳2か月）がいる。ようやくハイハイから“たっち”が出来るようになったばかりで、まだよく歩けないのだが、一緒にバッハの《ロ短調ミサ曲》のCDを聴いていると、その孫（男の子）が“グロリア（栄光の賛歌）”のところになると毎回突然立ち上がり、保育園で年上の子が踊るのを見て覚えたのだろうか、ニコニコこっち（私）を見ながら全身で身体を揺すって、歩くことはできないのにダンスを始める、あの姿を瞬時に思い出す。バッハの舞曲のリズムが人間の心の奥底にある本能を揺り動かしているとしか私には思えない。



■ワークショップ風景（写真提供：2枚とも、団員・岡村隆氏）

山本先生が進めていく練習・指導、そして合唱と進んでいく中で、喜さんとお父様のお顔もどんどん変わっていった。はじめの、緊張からか険しく見えるご子息の表情もほぐれ笑顔となっていた。到着直後は息を切らせていた喜さんも、ワークショップが進行するにつれて完全に会場に溶け込み、ひきつづいたミニコンサート“バッハ名曲アラカルト”での、石川優歌さんのピアノ独奏《フランス組曲》第5番では、首を傾け、歌っている時とは明らかに違う表情で静かに耳を傾けておられた。教会ではオルガンと合唱はいつも聴き慣れて居られることだろう。そして、大村恵美子先生指揮の合唱の最後では、前半で仕上げたコーラル《イエス わが喜び》を、一緒に、会場全員とともに歌い、ワークショップとミニコンサートが終わった（20：30）。

終了後、会場で片付けが始まって、喜（よしお）さんはしばらくお父様と一緒に椅子に座り、お父様から何回か促されるまで、なかなか会場を離れようとなさらなかった。そのお

2人の参加とその笑顔で、「野尻湖 2016 祝祭合唱団」は完全に成立したように思えた。体調不良となってもなんとか体調を取り戻し、準備が進み、参加者のためになされた演奏があった。その演奏で、笑顔が生まれた。たまたま参加なさった牧野さんご家族の参加だけでも、今回のワークショップは大きな意味があったのではないだろうか。

ワークショップが進む中、他の参加者の方も、初めから笑顔の若い方たちをはじめ、皆さんそれなりに楽しんでおられた。コンサートでは、演奏中、涙をぬぐう初老の女性の方が居られたことも見逃すことができない。

ワークショップとコンサートが終わり、参加者も帰り、団員も宿舎からの迎えのバスで帰った後、暗くなった公民館の正面玄関の戸締りをしておられる、教育委員会の担当スタッフの外谷真一さんは、別働の私に、「会場の正面駐車場にも、3階の窓から響いてくるきれいな合唱の歌声が楽しく美しくはつきりと聞こえ、ワクワクしました。回を重ねて参加者の人数が増えていくことを公民館としては願いたい」と話しておられた。

企画者の大村健二氏は、今回のこの初めての試み、このワークショップでできた合唱団を「野尻湖 2016 祝祭合唱団」と名付けている。メロディーと歌詞を歌えば、観客・聴衆も分かるだろうという思いから、さらに一歩踏み出し、聴く方たちが大きな声ではつきりと聴く方たちの分かる言葉で共に歌い、テキストを心の底から楽しむ。東京バッハ合唱団の場合、聴く方の99パーセントは日本人であるから、日本語テキストで聴く方が、演奏者と一緒に歌い心から楽しむことによって、バッハの歌のメッセージを伝えていこうという。この時、演奏者もまた共に練習し向上していく。メッセージのない歌などあり得ない。聴く方が、ことばで理解しない、したくもないようにテキストを歌っているのだったらそれは自己満足に過ぎないのではないか。このワークショップ・コンサートの試み、「野尻湖 2016 祝祭合唱団」の結成に、歴史ある東京バッハ合唱団の新しい第一歩を感じさせられた。公民館の職員の方々と再会の約束をして、暗くなった会場を後に、翌朝早朝発つことになっている宿舎に向かった。(残念ながら、私は、私用のため、最終日の神山教会での本番を経験しないで帰京することになっていました。)

「バッハ音楽は、“短調”の旋律であっても、苦しくても生きることをことばで考え、生活できることを感謝し、喜び真面目に楽しもうという、明日への希望と明るさがその中に歌われている。感情にどっぷりつかっている日本の民謡とはこの点でニュアンスが異なっていることに注意して歌いたい」と大村恵美子先生のお話があった。合宿初日練習の冒頭でこのことが語られたことを、今回のワークショップを終えて、私は忘れることができない。

(2016年8月8日、記)